

ルーマニア語における目的語の接語重複と文法化 —ブルガリア語との対照から—¹

菅井健太

Kenta SUGAI

1. 目的語の接語重複²

1.1. 概要

目的語の接語重複とは、人称代名詞のクリティック形が、文中の直接あるいは間接目的語の役割を担う同一指示の名詞句（人称代名詞の非クリティック形を含む）と重複して用いられる現象を指す。以下は、ルーマニア語における接語重複の例³である。(1a)では直接目的語が、(1b)では間接目的語が、性・数・格で一致した人称代名詞のクリティック形によって重複されている。

(1) a. *Am intâlnit*(-o) pe _____ ea.*
have.1.sg/pl. met her.acc.cl. accmark. her.acc.
「私(達)は彼女に会った。」

b. **(L) am dat telefon lui.*
him.dat.cl. have.1.sg/pl. given telephone him
「私(達)は彼に電話した。」

1.2. ルーマニア語と他のバルカン諸語における目的語の接語重複

ルーマニア語では、上記の例(1)にあるように、ある一定の場合においては目的語の接語重複は義務的となる。

その一方で、接語重複は常に義務的に行われるというわけではない。例えば、次の(2a)のように接語重複が全く行われない例や接語重複が随意的に行われる(2b)のような例も存在する。

(2) a. *(*Îl) citește ziarul.*
it.acc.cl. read.pres.3.sg. newspaper+the
「彼(女)はその新聞を読んでいる。」

b. *(Îi) putem zice adio vacanței.*
it.dat.cl. can.1.pl. say.inf. good-bye vacation.dat.
「私たちは休暇にサヨナラと言える。」

(2)にあるように、接語重複される目的語は限られている。その一方で、上の(1)のように義務的に重複される例があることからわかるように、ルーマニア語ではある程度文法化⁴しているという状況にある。

接語重複は、ルーマニアの周辺で話されている他のバルカン諸語においても同様に見られ、それぞれの言語間で程度の差はあるものの文法化した現象である。ここでは、ルーマニア語と対照するバルカン諸語として主にブルガリア語、そして一部マケドニア語を取り上げる。

例えば、スラヴ諸語の一言語であるブルガリア語でも目的語の接語重複は観察されるが、ルーマニア語とは異なった状況にあることが次の(3)にあるような簡単な対照からも判断することができる。

(3) a. **(L-) am văzut pe Ion.* (Romanian)
 him.acc.cl. have.1.sg./pl. seen accmark. Ion

「私(達)はイオンを見た。」

b. *Vidjah (*go) Ivan.* (Bulgarian)
 see.aor.1.sg. him.acc.cl. Ivan

「私はイワンを見た。」

(3a)はルーマニア語、(3b)はブルガリア語で同じ意味を表す例文である。ルーマニア語では接語重複は義務的に行われるのに対して、ブルガリア語では接語重複が行われるためには、適切なコンテキストが必須となってくる。逆に言えば、そのようなコンテキストが伴われな(3b)のような場合での重複は非文法的となる。

また、同じく目的語の接語重複を持つマケドニア語は、ブルガリア語と言語系統的にかなり近い関係にあるにもかかわらず、異なった状況を呈することが次の例(4)からも見て取ることができる。

(4) a. **(L-) am citit articolul.* (Romanian)
 it.acc.cl. have.1.sg./pl. read article+the

b. *Pročetoh (*ja) statijata.* (Bulgarian)
 read.aor.1.sg. it.acc.cl. article+the

c. **(Ja) pročitav statijata.* (Macedonian)
 it.acc.cl. read.aor.1.sg. article+the

「私はその記事を読んだ。」

(4a)はルーマニア語、(4b)はブルガリア語、(4c)はマケドニア語でそれぞれ同じ意味を表す例文である。ここでは、マケドニア語のみが目的語の接語重複を行うが、ルーマニア語とブルガリア語は共に接語重複が行われることはない。また、(3a)とは異なり、ルーマニア語でも接語重複がブルガリア語と同様に行われぬ。

これらのことから分かるように、目的語の接語重複の文法化が概して進んでいるとされるバルカン諸語間でも、目的語の接語重複の可否は一様ではない。

実際のところ、Lopašov (1978: 122)はバルカン諸語間の目的語の接語重複の文法化の程度に差があることを指摘し、次の(5)のような階層を提示した。左に行くほど、接語重複の文法化の程度が高いことを示している。

(5) マケドニア語 > (アルバニア語) > ルーマニア語 > (現代ギリシャ語) > ブルガリア語

ここで、(3)と(4)で示したのは簡易な対比であるものの、この Lopašov (1978)による文法化の程度の階層に一致しているものと考えられる。

2. 問題提起

上の(3)の例文や(5)の階層からもわかるように、一般的にはルーマニア語のほうがブルガリア語よりも目的語の接語重複は文法化の程度が高く、接語重複されるような目的語は多いと考えられる。その一方で、次の(6)のようにその状況が逆転するような例がみられる。

(6) a. *PE CINE(-l) doare capul?* (Romanian)
 accmark. who him.acc.cl. ache.pres.3.sg. head+the

b. *KOGO *(go) boli glavata?* (Bulgarian)
 who.acc. him.acc.cl. ache.pres.3.sg. head+the

「誰が頭痛いの？」

上記の(6)は、「頭が痛い」という身体的な感覚を表す述語を伴った文である。この時、(6b)のブルガリア語の場合は目的語の接語重複は義務的に行われるのに対して(cf. Arnaudova & Krapova (2007)など)、(6a)のルーマニア語の場合には、Dobrovie-Sorin (1994: 197)によれば接語重複は義務的ではなく随意的であるとされる。⁵つまり、文法化の程度が低いはずのブルガリア語で接語重複が義務的であるのに対して、文法化の程度がより高いはずのルーマニア語で随意的となっているのである。

このいわば逆転の例は、Lopašov (1978)による階層と一致するものではない。このことから、Lopašov (1978)の階層がどの程度正しいといえるものなのかという疑問が生まれる。本稿では、ルーマニア語とブルガリア語それぞれでどのような場合に目的語の接語重複が行われるかということを確認して、接語重複が行われる目的語の特徴を明らかにした上で、両言語の文法化の程度の違いについての検討を行う。

3. 接語重複と主題性

3.1. 接語重複される目的語の特徴

3.1.1. ルーマニア語

まずは直接目的語の場合の接語重複の状況を見ていく。人を表わす名詞に用いられる対格標識である前置詞 *pe* を伴った、人をあらわす普通名詞あるいは人名、人称代名詞などの目的語は動詞の前におかれるか後ろにおかれるかを問わず義務的に重複される。

(7) a. **(I-)* *a* *îmbrăcat* *pe* *copii*
 them.acc.cl. have.3.sg. worn accmark. children
 「彼(女)は子供たちに服を着せた。」

b. *Pe* *copii* **(i-)* *a* *îmbrăcat*.
 accmark. children them.acc.cl. have.3.sg. worn
 「その子供たちには服を着せた。」

その一方で、前置詞 *pe* をとらない普通名詞(有生・無生)であっても、定であり、動詞の前であれば接語重複が行われる。まず目的語が有生である場合の例として(8)が、無生である場合の例として(9)が挙げられる。

(8) a. *Copiii* **(i-)* *am* *îmbrăcat* *cu* *haine*.
 children+the them.acc.cl. have.1.sg. worn with clothes
 「その子供たちには服を着せた。」

b. **(I-)* *am* *îmbrăcat* *copiii* *cu* *haine*.
 them.acc.cl. have.1.pl. worn children+the with clothes
 「私はその子供たちに服を着せた。」

(9) a. *Parisul* **(l-)* *am* *vizitat* *anul* *trecut*.
 Paris+the it.acc.cl. have.1.sg./pl. visited year+the past
 「パリなら去年訪れた。」

b. **(L-)* *am* *vizitat* *Parisul*.
 it.acc.cl. have.1.sg./pl. visited Paris+the
 「パリを訪れた。」

上記の(8)及び(9)いずれの場合においても、動詞の前におかれる定の目的語は義務的に接語重複がなされる一方で、動詞の後ろにおかれる場合には逆に接語重複が行われない。

その一方で、無生で不定の目的語は、動詞前の位置であっても、接語重複は随意的となる。

(10) a. *Un succes* (*il*) *constituie* *rezultatele* *bune* *obținute* *la examen*.
 a success it.acc.cl. constitute.pres.3.pl. results+the good obtained in exam
 「成功は、試験で得たよい結果によって形作られる。」

b. *Rezultatele* *bune* *obținute* *la examen* (**il*) *constituie* *un succes*.
 results+the good obtained in exam it.acc.cl. constitute.pres.3.pl. a success
 「試験で得たよい結果は、成功を形作る。」

これらのことから、ルーマニア語における接語重複される直接目的語の特徴として次の階層を挙げることができると考えられる。

(11) 人間 > 非人間, 動詞前 > 動詞後, 定 > 不定

まず、人間が目的語である場合には、pe という前置詞を伴って、動詞の前でも後ろでも接語重複を義務的に行うことから、非人間の目的語に対する人間の目的語の優位性を見取ることができる。また、(9a)と(10a)の対比に見ることができるように、動詞の前におかれていても、目的語が不定であれば、接語重複は随意的になるということから、不定に対する定の優位性も見ることができる。さらに、(7)を除いて、動詞の前におかれる目的語の方が接語重複を許容、あるいは義務的としていることから、動詞の後ろよりも前のほうが重複されるという階層も観察される。また、同じように振る舞うように見える(8)と(9)で異なるのは、目的語が人間を表すか否かである。(8b)の目的語は人間を表しているので、上述の前置詞 pe を伴うことができ(ただし無冠詞となる)、その場合には動詞後ろの位置にある目的語の重複が義務的に行われることになる。それに対して、(9b)は人間を表す名詞ではないので pe は用いられえず、したがって接語重複もされえない。この点で(8b)と(9b)の目的語は異なった振る舞いを見せうる。前置詞 pe が接語重複の有無に関与するのは間違いないが、その前置詞の用法から、前置詞が用いられる目的語の意味的特徴を階層で表すならば、人間か否かで表せうるだろう。

次に間接目的語の場合について検討する。人称代名詞で表される間接目的語は、動詞前であろうが後であろうが、接語重複は義務的になされる。

(12) a. Lui *(ii) trebuie o carte pentru suflet.
 him.dat. him.dat.cl. necessary.pres.3.sg. a book for soul
 「彼は心の糧とするために本を必要としている。」

b. *(Ti-) am scris tie.
 you.dat.cl. have.1.sg/pl. written you.dat.
 「あなたに(手紙を)書いた。」

それ以外の間接目的語については、動詞前の位置にある場合、普通名詞で表される間接目的語は定であっても不定であっても常に重複がなされる。

(13) a. Fetei *(i-) a dat Petru o floare.
 girl+the.dat. her.dat.cl. have.3.sg. given Petru a flower
 「その女の子にはペトルが花をあげた。」

b. Unui om care iese la pensie *(ii) poți iertă orice.
 a.dat. man who go-out.pres.3.sg. to pension him.dat.cl. can.2.sg. excuse.inf. anything
 「年金生活に入る人に対しては、なんでも許すことができる。」

しかし、普通名詞で表される間接目的語が動詞後の位置にある場合には、定であっても不定であっても接語重複の有無は随意的である。(14b)は不定代名詞の例。

(14) a. (I-) am scris doctorului.
 him.dat.cl. have.1.sg./pl. written doctor+the.dat.
 「その医者に(手紙を)書いた。」

b. De fapt trebuia să (-i) spun cuiva lucrurile astea...
 in fact necessary.impf.3.sg. smp. him.dat.cl. say.sub.1.sg. someone.dat. works+the these
 「実際には、誰かにこのことを言わなくてはならなかった。」

これらのことから、ルーマニア語で接語重複される間接目的語の特徴として次の階層を挙げることができると考えられる。

(15) 人称代名詞 > 普通名詞, 動詞前 > 動詞後

まず、人称代名詞が間接目的語である場合には、動詞の前に置かれるか後ろに置かれるかにかかわらず接語重複が行われることから普通名詞に対する人称代名詞の優位性を見ることができる。また、動詞の後ろに置かれる間接目的語は、定か不定かにかかわらず接語重複が随意的となる一方で、動詞前に置かれる場合には義務的になされることから、接語重複の有無における動詞後に対する動詞前の優位性も見ることができる。

3.1.2. ブルガリア語

ブルガリア語で義務的に接語重複が行われるのは、基本的に非人称文で、述語が身体的・心理的感覚を表す場合に限られる。

(16) a. Na Ivan *(mu) se spi.
 datmark. Ivan him.dat.cl. ref. sleep.pres.3.sg.

b. Spi *(mu) se na Ivan.
 sleep.pres.3.sg. him.dat.cl. ref. datmark. Ivan
 「イワンは眠りたい。」

身体的・心理的感覚を表すという意味的特性上、目的語となるのは有生名詞に通常限られる。無生名詞が目的語となるのは擬人的用法などを除いて通常はない。

このことから、身体的・心理的感覚を表す述語を伴った文における目的語の接語重複に見られる目的語の特徴として次の階層を上げることができる。

(17) 有生 > 無生

またこの場合、目的語の位置に関わらず義務的な接語重複が行われるものの、目的語が動詞前におかれる方がより頻繁に行われ、「無標」な位置である(例えば, Krapova & Tiševa (2006: 418), Arnaudova & Krapova (2007: 7)など)ということも指摘しておきたい。

一方で、人間の身体的・心理的感覚を表す述語を伴った文以外の場合では、目的語の接語重複の有無や頻度には目的語の主題性⁶が大きく関与する。つまり、(16)のようなタイプの文では、必ずしも目的語が主題でなくてもよいのに対して、それ以外の場合に重複されるのは主題である目的語のみとなる。このことから、Guentchéva (1994), Asenova (2002)などは、接語重複は目的語を主題化するための文法化した手段であると結論付けてさえいる。

このような場合において重複を受ける目的語の特徴については、Leafgren (1997: 136-138)による数量的なデータを引用すると、次の表のようにまとめることができる。

表：重複される目的語の割合

高 ← <u>主題のなりやすさ</u> ← 低	
定(3.6%)	不定(0.5%)
有生(4.0%)	無生(1.8%)
与格(5.0%)	対格(2.2%)

これに加えて、Lopašov (1978: 31-32)は、動詞前の目的語の方が動詞後の目的語よりも頻繁に重複されることを指摘している。

これらのことを踏まえると、次のような階層を見出すことができる。

(18) 定 > 不定, 有生 > 無生, 与格 > 対格, 動詞前 > 動詞後

3.2. 主題性と文法化

Givón (1976)の主題性の普遍的階層及び、主題が陳述に先行するという事実(cf. Krapova (2004)など)より、主題的な特徴の階層として以下を挙げることができる。

- (19) a. 人間 > 非人間
- b. 定 > 不定
- c. 与格 > 対格
- d. 動詞前 > 動詞後

(19)で示したこれらの「主題的な特徴」は、ルーマニア語及びブルガリア語で接語重複を受ける目的語の特徴と多くの点で合致する。このことから、接語重複される目的語は、ルーマニア語においてもブルガリア語においても、主題性と深い関係があると考えられることができる。

その一方で、目的語が、主題と相補分布すると考えられる焦点⁷である場合の接語重複の有無についてみる。以下(20)は目的語が焦点となっている場合のブルガリア語とルーマニア語の例である。

(20) a. *Az (*go) vidjah samo IVAN.* (Bulgarian)
 I him.acc.cl. see.aor.1.sg. only Ivan
 「イワンだけを見ました。」

b. **(L-) am văzut numai PE ION.* (Romanian)
 him.acc.cl. have.1.sg./pl. seen only accmark. Ion
 「イオンだけを見ました。」

上記(20)では、「～だけ」にあたる *samo* 及び *numai* という語彙的手段を用いて、目的語を焦点とした。この時、ブルガリア語とルーマニア語の間では、接語重複の有無の点において大きな差異を見て取ることができる。(20a)のブルガリア語の例では接語重複は行われぬのに対して、(20b)のルーマニア語では義務的に行われる。ここからわかるように、ルーマニア語では接語重複を持つ目的語はそれ自体主題でなくてもよいのに対して、ブルガリア語では逆に主題でなくてはならない。

これらのことは、Givón (1976: 157)が類型論的なアプローチから提唱した文法化の発展のプロセスに関する見解と関係があるように思われる。

- (21) a. *the man, I saw him.* (marked) 'the man'の主題性+
- ↓
- b. *I saw him, the man.* (semi-marked) 'the man'の主題性±
- ↓
- c. *I saw-him the man.* (demarked) 'the man'の主題性-

主題である目的語は有標であるが(21a)、その有標性が時間軸に従って失われていき(21b)、最終的には(21c)のように「主題」という有標性が完全に失われ、本来の目的語として再解釈される段階に達するという Givón (1976)が示した文法化のプロセスと同様の過程を、ルーマニア語はたどっていると考えられる。⁸つまり、ルーマニア語において接語重複される目的語が、全般的に「主題的な特徴」を保持している一方で、(20b)に見るように、それ自体が主題でなくても接語重複がされるという状況にあることは、接語重複される目的語の「主題」という有標性がより失われているものと考えられる。(21)でいえば、より(21c)に近い段階に全体的に達している。特に(20b)に関しては、(21c)の段階に達している例であると言ってよいだろう。その一方で、ブルガリア語で接語重複される目的語はまだそれ自体が主題でなく

てはならないという点で、ルーマニア語より(21a)に近い段階にあると考えられる。したがって、接語重複された目的語が「主題」という有標性をより失っている段階にあると考えられるルーマニア語のほうがブルガリア語よりも、全般的に言えば、目的語の接語重複の文法化が進んでいるといえるということになる。

4. 終わりに

本稿では、ルーマニア語のほうがブルガリア語よりも、目的語の接語重複の文法化が全般的な点では進んでいるということを確認した。このことは、Givón (1976)による文法化のプロセス(21)において、ルーマニア語の接語重複の現状がブルガリア語よりも(21c)により近い様相を呈していることから言うことができる。

一方、(6)の場合については今後の課題とする。ただし、この(6)のようなケースは特別な場合であると考えられる。ルーマニア語において疑問代名詞が目的語となる場合には、次の(22)のように接語重複が行われることは普通ない。

(22) *Pe cine (*l-) ai văzut?*
accmark. who him.acc.cl. have.2.sg. seen

「誰を見たの？」

むしろ(6)のように、疑問代名詞の目的語が随意的であれ重複が行われるということは特別な例であると考えられる。(6)が(22)のような場合と異なるのは、身体的な感覚を表す述語を伴う文であるということである。この種の文は、別の要因が作用していると考えられ、例えば Givón (1976)で示されているような一般的な傾向からはそれるようなものであると考えることができる。したがって、この反例だけをもってして、Lopašov (1978)による(5)の階層を否定することはできないであろう。

身体的な感覚を表す述語を伴う場合に目的語の接語重複が好まれるという事実については、一般的には随意的な特徴を持つブルガリア語であっても義務的に重複が行われるように、重複が好まれるという点で似た傾向があることが読み取れる。対照的なアプローチからの研究の余地があると考えられるので、この点を今後の課題とする。

¹ 本稿は、日本ロマンス語学会第49回大会(2011年6月4-5日 神戸市外国語大学)における口頭発表原稿に加筆及び修正を施したものである。

² この文法現象の名称について、本稿では最近英語において術語として定着してきている‘clitic doubling’を採用した。また、その日本語訳については鈴木(2006)に従い「接語重複」とした。

³ 例文において接語重複が見られる場合、重複している要素を細い下線で、重複されている要素を太い下線で示す。また、例文において()の前後にアステリスクが用いられている場合がある。*()となっている場合には()内の語がないとその文が非文となることを意味し、(*)となっている場合には()内の語があるとその文が非文となることを意味する。アステリスクがない例文中の()は、()内の語の有無が随意的であることを意味する。また、ブルガリア語とマケドニア語の例文については、キリル文字翻字法 ISO9:1995 に依拠した翻字を行った。ただし、â についてののみ旧翻字法に倣い、母音 a の前に j を添えて ja と示した。

例において用いる略語は以下のとおり：

acc. = accusative, accmark. = accusative marker, aor. = aorist, cl. = clitic, dat. = dative, datmark. = dative marker, f. = feminine, impf. = imperfect (tense), inf. = infinitive, m. = masculine, n. = neuter, pl. = plural, pres. = present tense, ref. = reflexive pronoun, Q = question marker, sg. = singular, smp. = subordinating modal particle, sub. = subjunctive

⁴ 文法化とは、語彙から文法的形態へ、そこからさらにより一層文法的な形態への発展を指すものとする。(Heine & Kuteva 2002)

⁵ Dobrovie-Sorin (1994: 197)は、この場合の目的語の接語重複は随意的であるが、重複があるほうが好まれると指摘している。

⁶ 主題と陳述については、一般的に受け入れられている定義に従う。すなわち、主題(テーマ)はその文における話題を指す一方で、陳述(レーマ)はその主題について述べられている内容を指す。

⁷ 焦点(フォーカス)は、Lambrecht (1994: 213)による「主張が前提と異なるような語用論的に構成された命題の意味的な要素」という意味・語用論的な定義に従う。それと同時に、通常は文強勢とかかわりがあるものを指すと考える。また、主題と焦点は相補分布する関係にあるという一般的に受け入れられている考えに従う(Franks & Kings (2000: 254), Guentchéva (1994: 16))。本稿では例文において、焦点を表す場合に大文字で書き表すこととする。

⁸ 接語重複の文法化が進んでいる、つまり拡大の方向にあるということを示す客観的な事例として、義務的に重複される直接目的語の拡大を挙げることができる。人間を表す普通名詞や人名が *pe* を伴う直接目的語である場合、かつてのアカデミー文法である GLRI (1966: 145)では動詞に対して目的語が後ろに置かれる場合の接語重複を随意的としているが、最新のアカデミー文法 GLRII (2008: 401)では動詞に対する前か後ろかの位置を問わずこの場合の重複は義務的であるとする(本稿の例文(7)を参照)。

参考文献

- Araudova, O. & Krapova I. (2007) "Clitic Reduplication in Bulgarian: Towards a Unified Account". In Compton, R., Golezdzinowska, M., Savchenko, U. (eds.), *Annual Workshop on Formal Approaches to Slavic Linguistics. The Toronto Meeting 2006*. 1-24. Ann Arbor MI: Michigan Slavic Publications.
- Asenova, P. (2002) *Balkansko ezikoznanie: Osnovni problemi na balkanskija ezikov sąjuz.* (バルカン言語学: バルカン言語連合の主要な諸問題) Veliko Tărnovo: Faber.
- Dobrovie-Sorin, C. (1994) *The syntax of Romanian: comparative studies in Romance*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Franks, S. & King, T. H. (2000) *A Handbook of Slavic Clitics*. New York: Oxford University Press.
- Givón, T. (1976) "Topic, pronoun and grammatical agreement". In C.N.Li (ed.), *Subject and topic*, pp.149-188. New York: Academic Press.
- GLRI (1966): Graur, Al. et al. (eds.) *Gramatica limbii române. Vol.I. Ediția a II-a revăzută și adăugită*. București: Editura Academiei Republicii Socialiste România.
- GLRII (2008): Guțu Romalo, V., Pană Dindelegan, G. et al. (eds.) *Gramatica limbii române. II. Enunțul*. București: Editura Academiei Române.
- Guentchéva, Z. (1994) *Thématisation de l'objet en bulgare*. Frankfurt: Peter Lang.
- Heine, B. & Kuteva, T. (2002) *Word Lexicon of Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Krapova, I. (2004) "Word order in Topic-Focus structures in the Balkan languages". L'Europa d'oltremare. Contributi italiani al IX congresso internazionale dell'Association Internationale d'Études du Sud-Est Européen. România Orientale 17. 139-161. Roma: Bagatto Libri.
- Krapova, I. & Tiševa, J. (2006) "Clitic reduplication structures in the Bulgarian dialects". In Koletnik, M. & Smole, V. (eds.) *Diahronija in sinhronija v dialektoloških raziskavah*. 415-422. Maribor: Slavistično društvo Maribor.
- Lambrecht, K. (1994) *Information Structure and Sentence Form. Topic, Focus, and the Mental Representations of Discourse Referents*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Leafgren, J. R. (1997) "Bulgarian Clitic Doubling: Overt Topicality". In Franks, S. (ed.), *Journal of Slavic Linguistics* 5. 117-143. Ohio: Slavica Publishers.
- Lopašov, Ju. A. (1978) *Mestoimennye povtory dopolnenija v balkanskijh jazykah.* (バルカン諸語における目的語の代名詞重複). Leningrad: Nauka.
- Tomić, O. M. (2006) *Balkan Sprachbund Morpho-syntactic Features*. Dordrecht: Springer.
- 鈴木信吾著、千田憲訳 (2006) 「イタリア語における接語重複の構文：ルーマニア語との対照」, 敦賀陽一郎他編『言語情報学研究報告 11』157-193. : 東京外国語大学大学院地域文化研究科
- 春木仁孝 (1984) 「ルーマニア語における目的語の代名詞による二重化について」, 『ロマンス語研究 Vol.17』39-51. : 日本ロマンス語学会